

神武さまの流鏑馬

神武さまの流鏑馬は、昭和十五年紀元二千六百年を慶祝して復興されましたが、中世の頃には、秋のみのりの豊穰に湧き立つ農民たちが、大勢集って「ヤクサミ」という競べ馬を催す神事に变化しておりました。天保年間に高木正朝という紀伊の国人が著した「日本古義」に

日向國宮崎神武天皇御祭禮の流鏑馬を見物せり。
 凡馬数千七八百騎に餘れり。二十騎或三十騎ばかり、
 馬の鼻を隻べて相鬪を聞くと等しく一度に駈出す。
 其の疾き事矢の飛ぶが如く、雄々しき事又比ばむものなし。
 是吾が神武國のいさをしなるべし。



とあって、すでに草競馬に変化していたことがわかります。花の武道精神と土の匂いをする農耕の御祭とがめでたく結びついた、我が国ぶりの神事であるといわなければなりません。

定

一、敬神と尚武は一にして二にあらず先づ心身を潔齋して
 只管惟神の神武發揚に精進する事

二、治に居て亂を忘れず諸事實質簡素を旨として一意天業
 翼賛の至誠に燃え盡忠報國を期して弓馬の練磨に努むる事

三、各々士道の實踐に勵み廉恥禮節を尚ひ協心戮力して
 特に精進を怠らす同士の面目を毀傷せざる事

右之條々堅く相守り違背有之間敷事

紀元二千六百年庚辰八月

神事流鏑馬道場



宮崎神宮社務所
 宮崎県宮崎市神宮2丁目4番1号
 電話(0985)27-4004
 FAX(0985)27-4030
<http://miyazakijingu.jp>

宮崎神宮

神事流鏑馬

弓矢もて神の治めしわが国に生れし男子心ゆるぶな
 (明治天皇御製)



神事・流鏑馬(四月二日～三日)

流鏑馬の由来

神事流鏑馬は鎌倉武士の装束に身を固めた騎馬武者たちが、馬を疾駆して大弓で的を射る古神事です。深緑の神苑にくり広げられる勇壮華麗な春のこの神事は、さながら一幅の絵を見るように、懐かしい国振りの歴史を再現してくれます。

古く、日向の国は
真蘇我よ、蘇我の子等は馬ならば日向の駒よ太刀ならば呉の真刀諾哉蘇我の子等を大君の使はすらしき
(日本書紀)

と推古天皇の御代の豊明に謳われ、良駿の産地でありました。流鏑馬の発祥は詳らかではありませんが、神武天皇さま御東遷前の故地で、古来敬神尚武の気風篤く、古武道精神の精髓ともいべき流鏑馬が盛大に催されたことは当然でありました。

◆四月二日

手組定之儀 午前十時

その年の神事に奉仕する射手の面々とその順位(一ノ射手、二ノ射手、三ノ射手)と、平騎射の奉仕者と共に、乗用の馬も決定し発表がある。射手の随兵として鎧をつける弓袋差は、これに奉仕すればその年中は無病息災で一家安穩であると云われる。



流鏑馬行列 午前十時半～午後三時

射手、諸役以下宮崎神宮から川原祓斎場まで、一同装束をつけ行列を整え往復する。

川原祓斎場は、神代の昔、祓祓の地である筑紫の日向の橘の小戸のゆかりの名をとどめる大淀川の清流に臨んでいる。

川原祓之儀 正午ころ

射手一人一人が神事を無事斎行できるよう心身を潔斎し、また馬や諸具一切の穢れを清める。

神社参拝

一同祓いが済むと、小戸神社(宮崎市鶴島鎮座)、宮崎八幡宮(宮崎市宮田町鎮座)に正式参拝。恭々しく神前に額づき武運の長久を祈る。

◆四月三日

神武天皇祭 午前十時

「七十有六年の春三月甲午朔甲辰天皇檀原宮に崩りまししぬ。時年一百二十七歳。明年九月乙卯朔の丙寅、畝傍山の東北の陵に葬しまつる」(紀)とある当神宮の御祭神・神武天皇さまが崩御された日をお偲びする祭典。祭典に先立ち天皇が葬られている奈良県橿原市の畝傍山東北陵遙拝式も行われる。

饗膳之儀 午後二時

装束の着付けを終えた射手諸役の一同は社務所に参着し、各々所定の座につき、饗膳と神酒を賜る。簡素な白木造りの膳の上には、勝栗、素焼きの盆、耳かわらけに載せた箸がある。



奉幣之儀 午後一時半

一同社務所前に整列し、召立文に応じ順次繰出して祓所ににて祓いを終え大前に参着。射手が大幣を受け幣殿階下に進みて、大幣を左一右一左と大きく振りながら、一歩一歩大股にて退く。最後に大幣を立て持ち、左膝を着き右膝を折りて恭々しく拝礼する。

馬場入之儀 午後一時五十分

順次列次を整えつつ馬場に入る。射手の面々が奉仕を承って、初めて馬場に入る儀式であり、馬場には馬場をよく見せて、この日の奉仕に間違いないように慣れさせることでもある。

流鏑馬本儀 午後二時

先ず馬場の中央にある拝所に伺候した宮司は、「神事流鏑馬仕え奉れと宣る」と総奉行に告げる。総奉行畏みて「おう」と答え、引き退いて馬場本役や射手一同に向い、「神事流鏑馬始めませ」と下知する。一同これに応じて「おう」と答え本儀に入る。

馬場本役、皆紅金丸の扇を一閃するや、一の射手左遷三度輪乗りして、馬を馬場に追い入る。射手は馬場を駆けゆく馬上から一の矢、続いて二の矢、三の矢を放つ。的に当たると柵板でつくられた的(二辺六〇cm四方)は千々に砕けて、虚空へ四散する。ちなみにこの当り的一年の豊穰と発展を祝福する縁起物として珍重される。

※馬場(二三〇間 一三五m)



当りの

神録授与

正位の射手の騎射が一通り済むと、奉仕の射手は一騎ずつ中央の拝所の前まで来て、宮司から神録(紅絹の布)を受ける。神録とは流鏑馬奉納を神が嘉賞される御しるしである。射手は馬手の竹鞭の先でこれを受け、「かつぎ物」として左肩にかけ、威風堂々と引き上げるのである。

平騎射射技

射手の騎射奉仕が終わると、次は平騎射の面々がそれぞれ順位に従って騎射を行う。正位の射手と装束など若干の相違はあるが、実質的には変わるところはない。平騎射がすめば、神事流鏑馬の一切の行事は終わりを告げる。

垢飯振舞

流鏑馬を目出度く奉仕し終わって、装束を解き、関係者一同に吉例の垢飯振舞がある。垢飯とは、古来神武さまの「ヤクサミ」の勝馬を出した馬主が勝祝いに振舞った小豆の赤飯のことである。神前に供えられた大椀の赤飯が撤下されて列席の諸員に振る舞われるのであるが、各自はこれを持ち帰り家族にも頒つて頂戴するのが例となり、これを食すると夏病みせずといわれる。

